

信州大学-Curtin University
大学間学術交流協定に基づく
平成 23 年度夏期海外単位認定プログラム実施報告書



信州大学

-2011-



Curtin



平成 24 年 3 月 1 日
信州大学医学部保健学科

【目次】

I.	学術交流にあたって	1
II.	カーティン大学との学術交流を同総会は支援していきます	2
III.	学術交流の概要	3
III.	カーティン大学の概要	5
IV.	平成 23 年度夏期海外単位認定プログラム	
1.	はじめに	6
2.	夏期海外単位認定プログラム	
3.	研修期間	
4.	研修場所	
5.	研修プログラム概要	7
6.	参加人数	8
7.	指導教員	
8.	研修費用	
9.	研修日程	9
10.	研修プログラム詳細	10
11.	学生アンケート	12
12.	学生レポート	17

(編集後記)



(表紙の写真は、研修最終日の修了式後、Curtin 大学にて)

I. 学術交流にあたって

信州大学医学部保健学科長 寺田 克

本年度のプログラム実施に当たって問題となったのがリスク管理でした。昨年2月22日にニュージーランドでカンタベリー地震が発生し、クライストチャーチを中心に多くの犠牲者がでて、その中に日本人の語学学校留学生を含め海外からの留学生も多く含まれていました。これを受け本年度はリスク管理の観点より、帯同予定の教員に海外研修を組むにあたってのリスク管理研修会に出席してもらい、本プログラム実施委員会全員でその情報を共有するよう努めました。海外で問題が発生した場合、旅行会社のバックを兼ねたものでは現地の情報と対応の一部を旅行会社が負ってくれますが、本プログラムでは現地でのプログラム遂行上のきめ細やかな対応が必要なため、旅行会社任せにはできない状況です。そこで本年度は海外留学生安全対策協議会の緊急事故支援システムに登録しての実施となりました。

本年度は看護学専攻8名、検査技術科学専攻3名、理学療法学専攻3名、作業療法学専攻3名の学生さん17名が参加されました。本報告書にあるように、学生さんそれぞれが様々な視点で貴重な経験を積まれた様子がうかがえます。これらの経験が今後の学生生活、社会人生活に有意義に働くよう期待いたします。また昨年11月にはカーティン大学より June Houston 先生が本学に来校されました。オープンミーティングには30名以上の本プログラム参加者が出席し、学年・専攻を問わず Houston 先生を交えて交流を深めることができました。アウェイだけでなく、ホームでの交流も継続して計画していきたいと考えています。

本プログラムの運営には、カーティン大学との事前交渉、プログラムの作成、学生へのプログラムの紹介、航空券の確保と準備、支援金の確保、渡航中の学生さんの安全確保等のために多くの教職員が関わっています。また帯同教員不在中は学部の秋期に向けての準備時期にあたるため、在松の教職員の協力が不可欠です。保健学科教職員ならびに関係した教職員の方々にこの場をお借りし感謝いたします。

本年度は日本学生支援機構の平成23年度留学生交流支援制度(ショートビジット)の採択を受けご援助いただきました。本プロジェクトにご賛同いただき、学長裁量経費をご配慮くださった信州大学役員の皆様ならびに基金を援助してくださった信州大学医学部保健学科同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

Ⅱ. カーティン大学との学術交流を同総会は支援していきます

保健学科同窓会長 川上由行

西オーストラリア州パースにあるカーティン大学における2011年度の海外短期単位認定プログラムは、お盆休暇初日に当たる8月13日(土)から9月2日(土)までの3週間で実施されました。順調に経緯してプログラムは総ての日程を滞りなく終了して最終日を迎えたのですが、帰国に際して、想定していなかった「台風12号」の襲来に遭遇することになりました。引率教員と本学との緊迫したメールの送受信が繰り返されるなどヤキモキしましたが、参加学生の17名と帯同教員の全員が、元気で帰国することができました。

パースでの Curtin-Life を十分に満喫された学生さんには、掛け替えのない日々を体験されたことと思います。そしてこのプロジェクトの円滑運営に対して労力を惜しまずに支援された教員各位、そして実際に引率された教員各位には、遭遇した想定外の台風12号への臨機応変の対応など、本当にお疲れさまでした。

新型インフルエンザの猛威の前に残念ながら中止を決断せざるを得なかつた2009年度のような年度もありましたが、本プロジェクトは発足以来、着実に成果を上げて来ているのを実感させていただいております。最終的な実現には至りませんでした。Biomedical Sciences 学部の本学への教員招聘についても具体的な検討も行われました。今後は更に緊密な連携の中で、教員相互間の学術交流、また本保健学科学生、また保健学専攻大学院生とカーティン大学の学生相互間での益々の有効的な交流へと進展して行くことを祈念しつつ、われわれ保健学科同総会は、この学術交流を支援して行きます。建設的な意見交換の中でこの素晴らしいプログラムがより一層の輝きを増していくことを信じています。



Faculty of Health Sciences, Curtin University



信州大学医学部保健学科同窓会
School of Health Sciences, Shinshu University

Ⅲ. 学術交流の概要

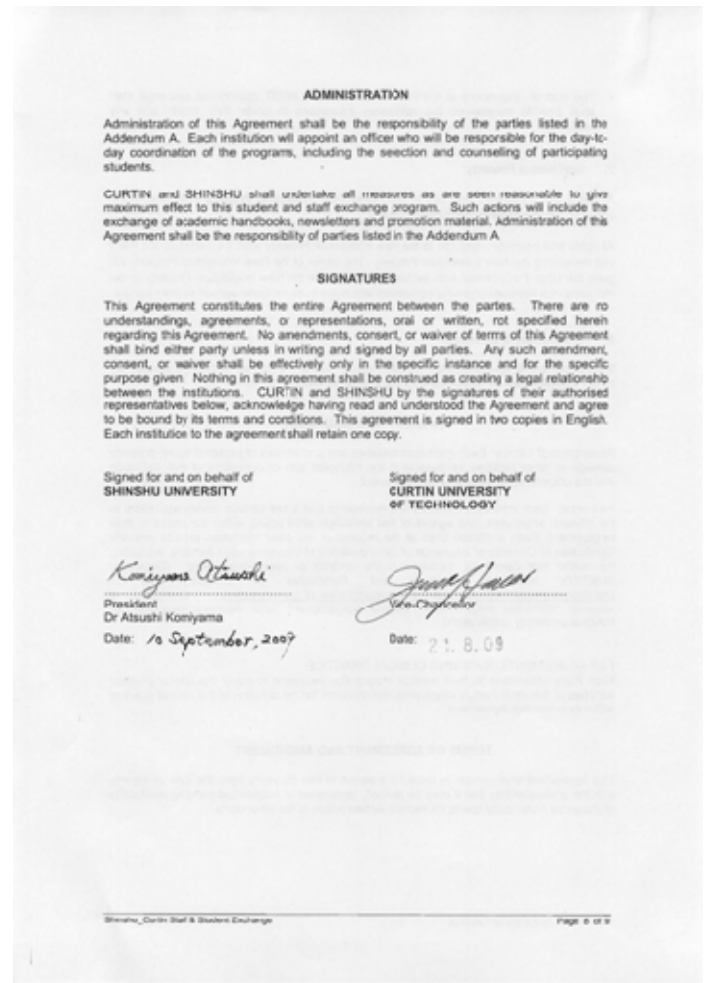
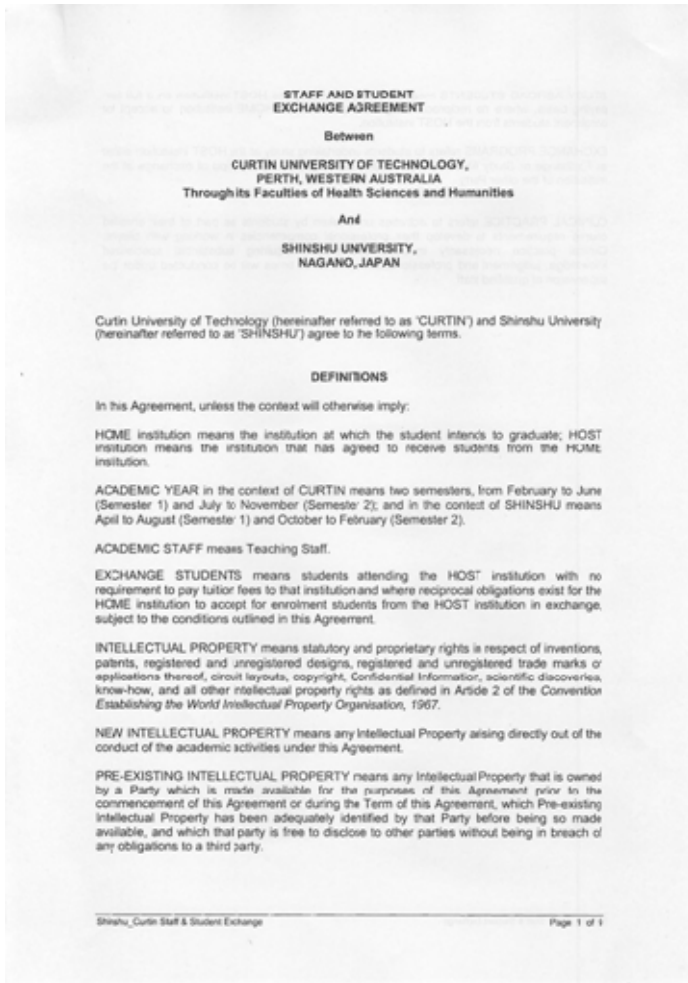
1. 学術交流協定及び学生の交流に関する覚書締結の経緯と交流実績

- 1) 1992年8月、イギリス、ロンドンで開催された第11回世界理学療法連盟学術集会に出席した信州大学医療技術短期大学部藤原孝之教授(現 郡山健康科学専門学校/東都国際ビジネス専門学校 理事・学校長)と、カーティン大学健康科学部ジョン・コール教授との間で教育・研究に関する情報交換が始まった。
- 2) 1997年3月、藤原孝之教授、楊箬隆哉教授(当時)およびゴウ・アー・チェン助手(現准教授)の3名が、カーティン工科大学副学長宛の本学学長親書を携え、健康科学部の遠隔地教育システムに関する資料収集、共同研究課題の打ち合わせを目的としてカーティン工科大学を訪問した。カーティン工科大学学長、健康科学部長、看護学科、医学検査学科、理学療法学科、作業療法学科等のスタッフとの会談の折、両大学間の、より積極的な学術交流が話題となり、教員、学生交流の早期実現に向け検討することで合意した。
- 3) 1998年7月-8月、藤原孝之教授が文部省在外研究員派遣でカーティン工科大学健康科学部理学療法学科客員教授として滞在した折、カーティン工科大学健康科学部スタッフミーティングに出席し、当該大学の多くの教官より大学間交流に関する質問を受け、同大学が信州大学との大学間学術交流に興味を示していることがわかった。
- 4) 1999年3月、本学藤原孝之、楊箬隆哉両教授がオーストラリアに出張した際、副学長ジョン・ミルトン・スミス教授、健康科学部長チャールズ・ワトソン教授、看護学科主任教授マイケル・ヘイゼルトン、理学療法学科主任教授ジョン・コール、国際教育課程担当パメラ・ロバーツ女史等と両大学間の学術交流推進を話題に会談した。両大学の資料を交換し検討した結果、単一学部間に留まらず、広い学際領域での学術交流を目指すことを目標にすることで合意した。その際、カーティン工科大学副学長から大学間協定に関する雛形文書を預かった。
- 5) 1999年4月、学術交流協定を締結した。
- 6) 1999年5月、横浜で開催された第13回世界理学療法連盟学術集会に特別講演演者として来日したジョン・コール教授が、信州大学を表敬訪問し特別講義を行った。
- 7) 2000年8月、学術交流協定に基づく学生の交流に関する協定書を締結。同9月、宮坂敏夫教授(短期大学部長)以下教官、学生20名がカーティン工科大学を表敬訪問し、各学局の国際交流担当者と短期留学の可能性を協議した。帰国後、部長のもとに5名からなるチームを置き、プログラムの実施計画を作成した。
- 8) 2001年8月、信州大学医療技術短期大学部学生32名がカーティン工科大学にて第1回夏季留学・単位認定プログラムに参加した。
- 9) 2002年(第2回)は27名、2003年(第3回)は24名、2004年(第4回)は20名、2005年(第5回)は29名、2006年(第6回)は28名、2007年(第7回)は15名および信大附属病院看護師2名、2008年(第8回)は31名(内大学院生2名)、2010年(第9回)は19名が夏季留学・単位認定プログラムに参加した。
- 10) カーティン教員招へい:2007年1~2月、国際教育課程ディレクター パメラ・ロバーツ、2010年1月、国際教育課程ディレクター アラン・トルク。

2. 学術交流協定及び教員と学生の交流に関する協定書の更新

1999年4月に締結された学術交流協定及び2000年8月に締結された学術交流協定に基づく学生の交流に関する協定書は、2004年4月に信州大学とカーティン工科大学の間で、「学術交流協定」及び「学術交流協定に基づく教員と学生の交流に関する協定書」として更新され、2009年には信州大学国際交流センターを窓口とした大学間協定となり、夏期研修プログラムとカーティン教員招へいが医学部保健学科とカーティン大学英語センター(Curtin English Language Center, CELC)・健康科学部により企画・実施され、両校の交流は一層親密に深められることになった。また、本協定に基づき、信州大学はカーティン大学から短期留学生(学部)を受け入れている。

教員と学生の交流に関する協定書 (2009.9)



IV. カーティン大学の概要

1. 設立

- 1) 1967年: The Western Australian Institute of Technology (WAIT) として創設。
- 2) 1987年: Curtin University of Technology (カーティン工科大学) となる。
- 3) 2010年: Curtin University となる。

*カーティン工科大学の名称は、オーストラリア首相を歴任したジョン・カーティン創設者に由来する。パースは日本でも古くから遠洋漁業の基地として知られている。広大なキャンパスを有機的に機能させるため、学内に国際教育担当部門を独立させ、情報ネットワークを整備し、国内外の教育研究機関と遠隔地教育・研究を推進している。1996年から、シンガポール、マレーシア、インドネシア、香港等の教育機関とインターネットを利用した学位取得課程を展開し、実績を上げている。大学院教育では、卓越した教育プログラムが評価され、非英語圏のみならずアメリカ、カナダ、ヨーロッパの留学生も相当数在学している。

2. 位置

- 1) 西オーストラリア州
- 2) メインキャンパスはパース(Perth: 西オーストラリア州の州都。人口約120万)の郊外ベントレー(Bentley: 中心部より10キロ南東へ位置、海岸まで車で20分)に立地し、他にPerth 中心部の大学院キャンパスとその他のキャンパス(Kalgoorlie, Muresk, Sydney, Sarawak; Malaysia)を有する。

Address: Kent Street, Bentley, WA6102, Perth, Western Australia
TEL : 08-9266-9266, HP-address: <http://www.curtin.edu.au/>

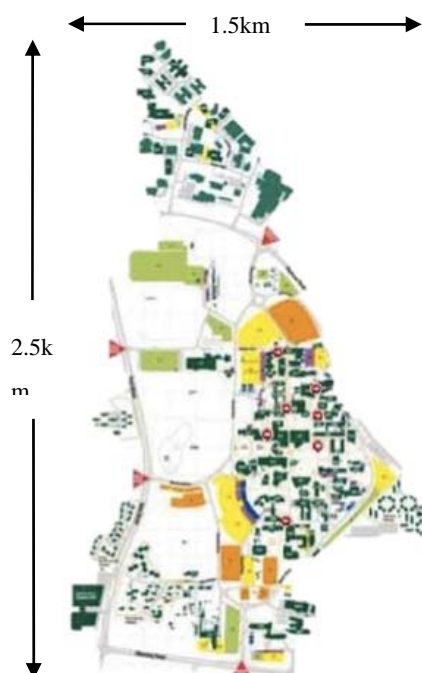
3. 学部等

- 1) 学部: 経営学部, 健康科学部, 人文学部, 理工学部, 先住民研究
- 2) 大学院: 経営学, 健康科学, 人文科学, 理工学

4. 学生数(2010年度)および

教職員数(2011年度)

- 1) 学生数: 44,634人
男性 21,686人, 女性 24,948人
現地留学生: 120ヶ国, 10,702人
在外留学生: 79ヶ国, 9,174人
(オーストラリア外キャンパス, センター在籍)
- 2) 教員数: 1,533人
男性 830人, 女性 703人
- 3) 職員数: 1,863人
男性 670人, 女性 1193人



V. 平成 23 年度夏期海外単位認定プログラム

1. はじめに

信州大学-カーティン工科大学間学術交流協定にもとづき、平成 22 年度夏期海外単位認定プログラムが平成 23 年 8 月 13 日から 9 月 2 日の約 3 週間にわたり、カーティン大学及びパース市内外の関連施設・病院で実施された。本年のプログラムには 17 名の信州大学医学部保健学科学生が参加した。

カーティン大学での単位認定プログラムの実施にあたり、5 月から 7 月にかけて、単位認定プログラム全般のオリエンテーション、研修内容の説明、研修関係資料の配布と事前学習の説明が行われた。

2. 夏期海外単位認定プログラム

- 1) 目的:他大学・文化での学習・生活体験を通じ、国際的視点から医療従事者としての態度を涵養する。
- 2) 本学における単位認定:国際医療協力論の単位として認定する。単位認定には、信州大学、カーティン大学における全てのプログラムに参加することとし、研修レポートの提出が必須である。

3. 研修期間

平成 23 年 8 月 13 日(土)～ 9 月 3 日(土), 22 日間

4. 研修場所

1) 研修キャンパス; カーティン大学ベントレーキャンパス

2) 見学施設

看護学専攻

Wearne Nursing Home, Perth

Fremantle Hospital, Fremantle

King Edward Memorial Hospital, Perth

検査技術科学専攻

Wearne Nursing Home, Perth

Perth Pathology Lab, Fremantle

Australian Red Cross Blood Donor Centre, Perth

理学療法学専攻

Wearne Nursing Home, Perth

Physio Services Bentley Clinic, Curtin University

Shenton Park Rehabilitation Hospital, Perth

作業療法学専攻

Wearne Nursing Home, Perth

Shenton Park Rehabilitation Hospital, Perth

State Child Development Centre, West Perth

5. 研修プログラムの内容 (Curtin University)

第1週; Orientation & English Class/Hospital Communication for Health Professional (CELC*)

- ・カーティン大学および CELC のオリエンテーション
 - ・ CELC による英語および医療英会話の授業
 - ・キャンパスツアー
- (* CELC: Curtin English Language Center)

第2週 ; Combined Lectures/ Clinical Visits

- ・保健医療領域の合同授業
 - ① The Australian Health Care System
 - ② Careers in OT
 - ③ Physiotherapy in Rural and Remote Regions
- ・ Auditing & Tutorials (看護・検査・理学・作業に分かれて, 授業の聴講)
- ・実習(看護学, 検査技術科学)
- ・Excursion (Swan Valley)
- ・施設見学
 - ① Shenton Park Rehabilitation Hospital, Perth
 - ② Wearne Nursing Home, Perth

第3週; Combined Lectures/ Tutorial, Practice, Clinical Visits & Graduation Ceremony

- ・専攻別専門領域の授業
- ・実習(看護学, 検査技術科学, 理学療法学, ・作業療法学)
- ・アボリジニの文化とライフスタイルについての授業
- ・施設見学
 - ① Fremantle Hospital, Fremantle
 - ② King Edward Memorial Hospital, Perth
 - ③ Perth Pathology Lab, Fremantle
 - ④ Australian Red Cross Blood Donor Centre, Perth
 - ⑤ Community Based Physio Services Bentley Clinic, Curtin University
 - ⑥ State Child Development Centre, West Perth
- ・修了式



クリニカルビジット(シェントンパーク リハビリテーション病院)

6. 参加人数

看護学	:	8名(2年生2名, 3年生6名)
検査技術科学	:	3名(3年生3名)
理学療法学	:	3名(2年生3名)
作業療法学	:	3名(2年生2名, 3年生1名)

合計 17名

7. 引率指導教員

プログラム担当教員

大平雅美 教授, 太田浩良 教授, Goh Ah Cheng 准教授, 寺澤文字 准教授, 政時和美 助教

8. 研修費用

研修費用

【内訳1】グループチケット利用

・往復航空運賃(グループチケット)	191,000円
・往復バス代	17,000円
・特別プログラム授業料等	165,000円
英語クラス, 保健学共通講義, 専門別(看護, 検査技術, 理学療法, 作業療法)講義・実習, 施設見学(含む移動費用, 指導支援費用), 緊急事故支援システム料	
・滞在費(3週間)	60,000円(ホームステイ, 食事込)
計	433,300円

現地プログラム担当教員4名分の航空運賃, 宿泊費は信州大学国際交流経費と保健学科同窓会寄付金等から計上された。

研修支援

平成23年度夏期海外単位認定研修は, 独立行政法人日本学生支援機構(Japan Student Services Organization; JASSO)の平成23年度留学生交流支援制度(ショートビジット)に応募, 採択され, 参加学生17名全員に8万円の奨学金が支給された。

9. リスク管理体制

昨年度のニュージーランド地震時の日本人留学生被災等を踏まえ, 平成23年度からは, 信州大学が正会員となっている特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会(The Japanese Council for the Safety of Overseas Studies; JCSOS)の緊急事故支援システムに加入し, 研修中の不慮の事故に対するリスク管理体制を強化した。

9. 研修日程

- ① 8月13日午後4時半30分に信州大学北門よりバスで出発し、午後9時30分、東京羽田空港に到着した。14日午前0時30分にSQ(シンガポール航空)633便で羽田空港を出发し、チャンギ空港(シンガポール)でSQ223便(午前9時30分発)に乗り継いだ。
- ② 8月14日午後2時40分パース空港に到着し、カーティン大学国際教育担当者の出迎えを受けバスにてカーティン大学ベントレーキャンパスに移動した。カーティン大学でホームステイ先の家族(ホストファミリー)の出迎えがあり、各々がホームステイ先に向かった。学生はホストファミリーから、ホームステイ先での生活の規則、通学経路の案内(ホームステイ先は大学から徒歩20分の所からバスを乗り継ぎ1時間程度かかる所までいろいろある)、周辺の案内などのオリエンテーションを受けた。
- ③ 8月15日カーティン大学にてオリエンテーション、学生カードの発行などが行なわれた。
- ④ 8月16日～9月1日の期間、英語および医療英会話の授業、オーストラリアのヘルスケアに関する授業、保健科学領域の授業、専攻別の授業聴講、実習、チュートリアル及び施設見学のプログラムが実施された。プログラムの詳細はP9～10に示した。
- ⑤ 9月1日午前10時30分からGraduation Ceremony(修了証書授与式)行なわれ、学生が一人ずつ英語でスピーチをした。続いてFarewell Lunchがひらかれた。その後、ベントレーキャンパス、パース市内あるいはホストファミリー宅で一時を過ごし、翌2日、再びキャンパスに集まり、午後1時にベントレーキャンパスからバスにてパース空港に移動し、午後3時55分発チャンギ空港行き(SQ226便)に搭乗した。折り悪く、台風12号の日本上陸と重なる帰国となったが、午後11時55分チャンギ発、東京成田空港行きSQ638便はフライトのキャンセルや遅れも無く、無事、成田空港に到着した。
- ⑥ 帰松時のバス運行路の変更はあったが、9月3日午後3時、信州大学北門到着、3週間の短期留学を終え解散した。



Curtin 大教員による Australian Health System の授業

10. 研修プログラム一覧



Curtin University

DEPARTMENT of LANGUAGES and INTERCULTURAL EDUCATION
 SHINSHU UNIVERSITY ENGLISH and HEALTH SCIENCES STUDY TOUR PROGRAM
 at CURTIN UNIVERSITY
 15thAugust – 30thAugust 2011

TIMETABLE

Week One

Time	Sunday 14 August	Monday 15 Aug	Tuesday 16 Aug	Wednesday 17 Aug	Thursday 18 Aug	Friday 19 Aug
10.00 – 12.00		Orientation 211.226 Welcome Morning tea Curtin Student Cards	English Class: Introduction to Australian Culture 211.226	9-11 am English Class 211.226	English class 211.226	8:30-10 am Monica Wong Tour of Faculty of Health Sciences 400 (Public Health) Level 2 – entrance (Faculty Student Services Office)
12.00 – 1.00	LUNCH 12:00 language exchange with Curtin students					
1.00 – 3.00	Arrive 4 pm Perth airport Bus to Curtin Homestay briefing Host family pickup 5:30-6 pm	OASIS Login 208.204 --how to use TransPerth --Excursion website search Smartrider forms	English for health professionals 211.226	MRSA Testing (Level 1, Building 109)	English for health professionals 211.226	

Week Two

Time	Monday 22 Aug	Tuesday 23 Aug	Wednesday 24 Aug	Thursday 25 Aug	Friday 26 Aug
10.00 – 12.00	Careers in OT Jennifer Buzzard 211.226 (whole group)	Physiotherapy in Rural and Remote Regions: Robyn Fary 201.504C (cancel)	Tutorial: Physiotherapy in Australia 408 room 4502 10.30am Wearne Nursing Home 1 Gibney St, Cottesloe (Nursing, BMS Students)	BMS-site visit (cancel) 10.00am- Shenton Park Rehab Hospital-PT/OT, BMS Nursing: 10.00am-12.00pm Nursing Practice 264 Lab Insertion and feeding (nasal gastric) Sue Boylan 405:333 – 4 students 405:336 – 4 students (Nursing students)	9.00 – 3.00 Meet at taxi stand 3 Excursion to the Swan Valley: Caversham Wildlife Park, Sandalford winery and Margaret River Chocolate Factory *unaccompanied (wine tasting optional)
12.00 – 1.00	LUNCH				12.00-13.30 PT/OT meeting with Curtin students from Japan

1.00 – 3.00	<p>Guest Speaker; Aboriginal Culture and Lifestyle Josie Boyle</p> <p>211.226</p>	<p>OT—audit Foundations of Occupational Therapy 1-3 pm 213.104 Kate Fischer</p> <p>whole group --3.00-3.30pm A'noon tea</p> <p>3.30-5.00pm Lecture: The Australian Health Care System Allan Tulloch (whole group)</p>	<p>OT meeting with Professor Torbjorn Faulkmer Research and Autism 401-reception 1-3 pm</p> <p>Biomed(cancel)</p> <p>PT: Audit Lab Details to follow</p>	<p>2.00-4.00pm Nursing Practice 263 Lab Wounds care/Aseptic technique Liz Frehner 405:314– 4 students 405:316– 4 students (Nursing Students)</p> <p>Biomed: Audit Lab/Lecture (cancel)</p>	
--------------------	--	---	--	--	--

Week Three:

Time	Monday 29 Aug	Tuesday 30 Aug	Wednesday 31 Aug	Thursday 1 Sept
10.00 – 12.00	<p>OT—audit Ergonomics and Safety Science 10-12 108.114 Sharon Kessing</p> <p>To be confirmed Physiotherapy in Rural and Remote Regions: Robyn Fary</p>	<p>OT—audit Orthotics-Principles and Concepts 10-11 am 108.102 Karen Long-Buttgeig</p> <p>OT—audit Environment, Health and Disability 11-12 pm 108.102 Rebecca Waters</p> <p>PT-Bentley Clinic site visit Level 2 Bldg 400</p> <p>BMS: Red Cross 10-12 To be confirmed Pick up taxi stand3--9:30</p>	<p>Nursing-10-11am Fremantle Hospital visit Ann Hobson Pick up taxi stand 3—9am</p> <p>PT--Clinical Anatomy and Physiotherapy Practice 152 10am 408.2507</p> <p>OT-9 am-3 pm State Child Development Centre Alma Dender Pick up taxi stand 3—8:15 am</p>	<p>10.00 – 10.30 Feedback</p> <p>10.30 – 11.30 Graduation Ceremony</p> <p>11.30 – 1.30 Lunch</p>
12.00 – 1.00	LUNCH			
1.00 – 3.00	<p>1.00-3.00pm Lab by Danelle Selley 405:336 Suture and staple removal and dressings (Nursing Students)</p>	<p>Orthotics and Rehabilitation Science OT-1-2 pm lab Natasha Stocks 108:119</p> <p>PT--Movement Science 252 1.30pm 408.2507</p> <p>3-5 pm Indigenous Health and Culture Julie Hoffman 405:435 (whole group)</p> <p>Japanese language exchange with undergraduate students 1-3 Birdgarden</p>	<p>PT-- Musculoskeletal Science 252 2pm 408.2500</p> <p>BMS: Perth Pathology Lab Fremantle 2:30-3:30 Pick up taxi stand 3--1:45</p>	<p>Free</p> <p>Japanese language exchange with undergraduate students 1-3 Birdgarden</p>

11. 学生アンケート(N=15)

A. 出発前の準備

(1) 費用の捻出

	N
家族が全額負担	5
自己資金のみ	4
自己資金と家族の支援	7

(2) 渡豪前の自己学習

	N
自己学習した	12
何もしなかった	4

(3) プログラムの発表時期

(4月の新入生・在校生オリエンテーション)

	N
適切	14
不適切	1

(4) 参加申し込み締め切り期限

	N
適切	15
不適切	0

(5) オリエンテーション時期・回数

	N
適切	13
不適切	3

(6) オリエンテーション内容

	N
適切	11
不適切	5

【事前学習した内容】

- ・英会話
- ・医療英語
- ・アボリジニ
- ・メディケア
- ・豪州や日本の医療制度, 保険制度
- ・パスについて

【事前学習が必要だった内容】

- ・英会話
- ・医療英語

【3のコメント】

- ・5月頃のアナウンスがよかった。

【5のコメント】

- ・すべてには出席できない。
- ・試験直前は避けて欲しい。
- ・パスポート, 航空運賃に関する説明を早い時期にして欲しい。

【6のコメント】

- ・プログラムに関する説明。
- ・英語の事前学習の必要性。
- ・ホームステイで必要なもの。
- ・ホームステイ先の詳細情報。
- ・現地の気候について。

B. ホームステイについて

(1) よかったこと

<英語力が向上した>

- ・自分の英語能力について知ることができた。
- ・英語が完璧でなくても、伝わることがわかった。
- ・ファミリーが話している内容を聞き、理解する力がついた。
- ・英語が話せないなりに伝える力がついた。

<豪州の異文化を体験できた>

- ・オーストラリアの家庭料理を味わえた。
- ・日本と異なる文化に触れることができた。
- ・観光としてではなく、その国の生活を体験できた。

<人間関係が広がった>

- ・他国の留学生と交流ができた。

<自分が前向きに成長できた>

- ・人見知り直った。
- ・積極的に物事に取り組めるようになった。
- ・視野が広がった参加動機。

(2) 困ったこと

<コミュニケーションの難しさ>

- ・英語力不足で伝えたいことが伝わらなかった。
- ・自分で困ったことを詳しく伝えられない。
- ・ファミリーが体調を崩した時に、力になってあげられなかった。

<生活の違い>

- ・洗濯の頻度が少なく、服がたりなくなった。
- ・シャワー時間の制限があり肌が荒れた。
- ・部屋にストーブがなく、服のみで温度調節しなければならなかった。
- ・初日に家の鍵を空けるのに時間がかかった。
- ・部屋が薄暗かった。

<ホストファミリーの内情>

- ・ファミリーの中に留学生を好まない人がおり、その人と生活リズムが合わないようにすることに気疲れした。
- ・小さい子どもの相手をするのが大変だった。
- ・ファミリーの子どもに対するしつけが厳しく、見ていられなかった。

<その他>

- ・出費がかさんだこと。

<要望他>

- ・ホームステイ先によって交通費自己負担分が異なる点を改善して欲しい。
- ・交通の便が悪いホームステイ先は遠慮したい。
- ・あまりに幼い子どもをもっているファミリーは少なくして欲しい。
- ・通学のための交通費が高い。

C. 研修コースについて

(1) 印象に残った見学先

① Fremantle Hospital (4名)

- ・急性期看護に興味があった。
- ・日本人ナースがいきいきと働いていた。

② Kings Edward Hospital (4名)

- ・水中分娩室に興味深かった。
- ・家庭に似た分娩室に興味深かった。

③ Red Cross Blood Centre (3名)

- ・機器を使うところなど、日本と似ていた。
- ・白衣手袋をしていなかった。
- ・説明が充実していた。

④ PT Clinic (3名)

- ・説明が丁寧で分かり易かった。
- ・日本と異なるシステムを見られた。
- ・実習の雰囲気を感じることができた。

⑤ State Child Development Centre (2名)

- ・実際の OT 場面を見学できた。

(2) よかったこと

<海外の医療について学習できた>

- ・信大では学習できないことが学べた。
- ・カーティン大学の学生と講義を受けることができた。
- ・オーストラリアの医療に触れることができた。
- ・パースの医療機関を見学できた。

<異文化体験>

- ・アボリジニの文化について学べた。
- ・他国の味を堪能できた。
- ・ホストファミリーと仲良くなれた。
- ・日本とオーストラリアの共通点、相違点を学べた。

<英語力の成長>

- ・英語の大切さに気がついた。
- ・異文化の中で暮らし、英会話のスキルが高まった。
- ・英語で外国人と会話ができた。

<自分の変化>

- ・自分の学習の意欲が高まった。
- ・「何を学びたいか」と問われたこと。
- ・(信大の)先生たちと仲良くなれた。

(3) 困ったこと

<英語力の乏しさ>

- ・英語が理解できても意見を言えない。
- ・英語の講義の聞き取りが難しかった。

<講義について>

- ・他専攻の講義は事前学習もしていなかったため難しかった。
- ・スケジュールが直前になるまで決まらない。
- ・カーティンの教員が講義をボイコット。
- ・授業のキャンセルが多い。
- ・施設見学に教員の引率がなかった。

<その他>

- ・ホームステイファミリーと仲がよくないことがあり、気疲れした。
- ・携帯電話を購入するよう、ファミリーに頼まれたのが困った。
- ・買い物をするためのまとまった時間が取れなかった。
- ・週末の交通機関の都合で、自由に動き回れなかった。
- ・JCB カードが使えない ATM があった。

(4) 要望他

<講義について>

- ・PT/OT の話しはよくわからなかった。
- ・NS の座学の講義や解剖の授業を受けてみたかった。
- ・授業内容の割には授業料が高い。
- ・検査の授業がないのは非常に残念だった。
- ・説明を受けた内容と違う。キャンセルが多すぎ準備が不十分。
- ・専門分野の講義を増やして欲しい。

<ホームステイについて>

- ・ホームステイ代が高い。

- ・個人個人の交通費に差がありすぎる。

<施設見学について>

- ・説明が難しく理解できないことがしばしばあった。
- ・見学時間が短く、もっと話を詳しく聞きたかった。

<研修全体について>

- ・あらかじめはっきりした予定を決定して欲しかった。
- ・カーティン側の対応がいい加減であった。
- ・もっと、英会話の授業が多くあったほうがよい。
- ・フリーの時間がありましたが、その時間に、自分の専攻の講義を受けたかった。
- ・今後は是非 OT のコースを開講してほしい。
- ・カーティンの学生が受けている nursing や midwife の講義を受けたかった。
- ・解剖の授業を受けたかった。

(4) 研修が与えた影響 (自由記載)

<学ぶことへの意識の変化>

- ・英語の勉強に対するモチベーションが高まった。
- ・日本での講義への参加態度を見直すいい機会となった。
- ・日本での学習に対する意欲が高まった。
- ・日本についてまだ学ばなければならないことがたくさんあることを学んだ。
- ・勉強の大切さを学んだ。
- ・勉学に対する意欲が高まった。

<専門分野や医療への学習意欲の向上>

- ・日本の医療を見つめ直すいい機会となった。
- ・これから更に勉強しよき看護師ないし助産師になりたいと思えた。

<視野の広がりや将来展望>

- ・改めて日本の文化や医療を見つめ直す機会になった。
- ・改めて日本の国柄の良さを知れた。
- ・社会に出た際の仕事の幅や選択肢に広がりを持てた。
- ・将来、海外での就職も考えるようになった。

<人間としての成長>

- ・自分の意思を伝える大切を学んだ。
- ・多くの人に支えてもらったことで、人のつなが


りの大切さを知った。

- 積極的に行動できるようになった。
- 自分の考えを表現することの大切さを知った。
- 言葉ではない伝達手段の大切さを知った。
- 学びたい、知りたいと思う気持ちが漲った。
- 人との関わりの大切さを知った。

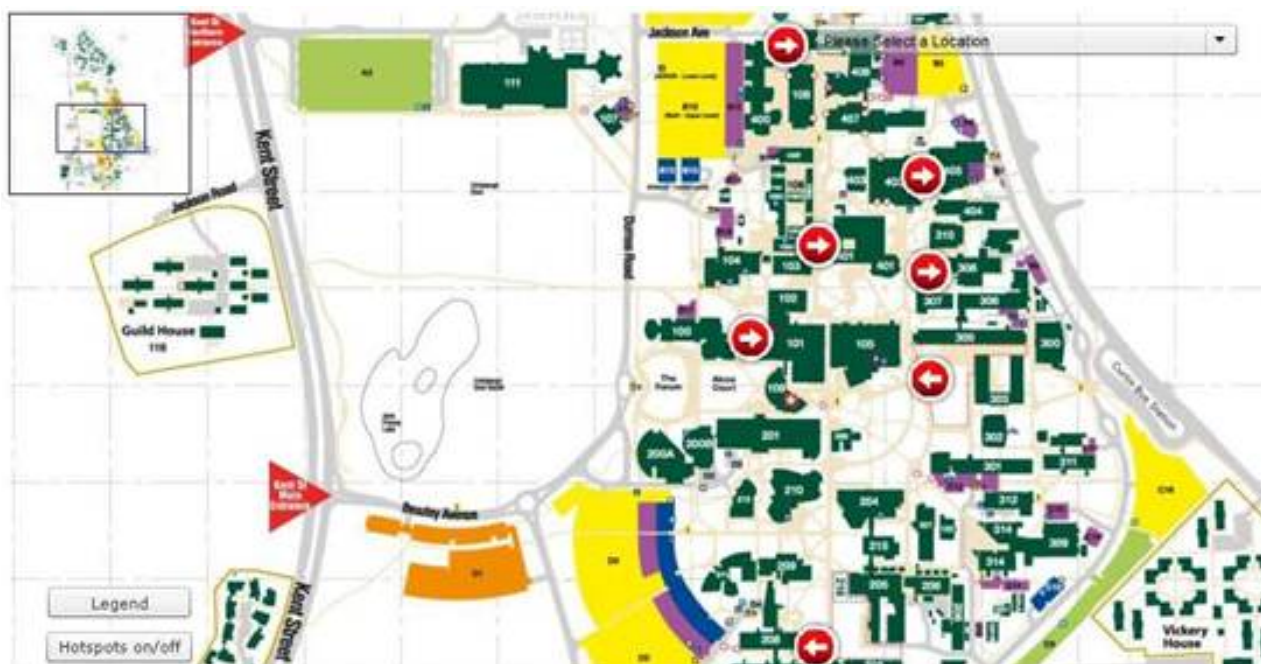


Curtin 大学図書館

研修施設, カーティン大学ベントレーキャンパス

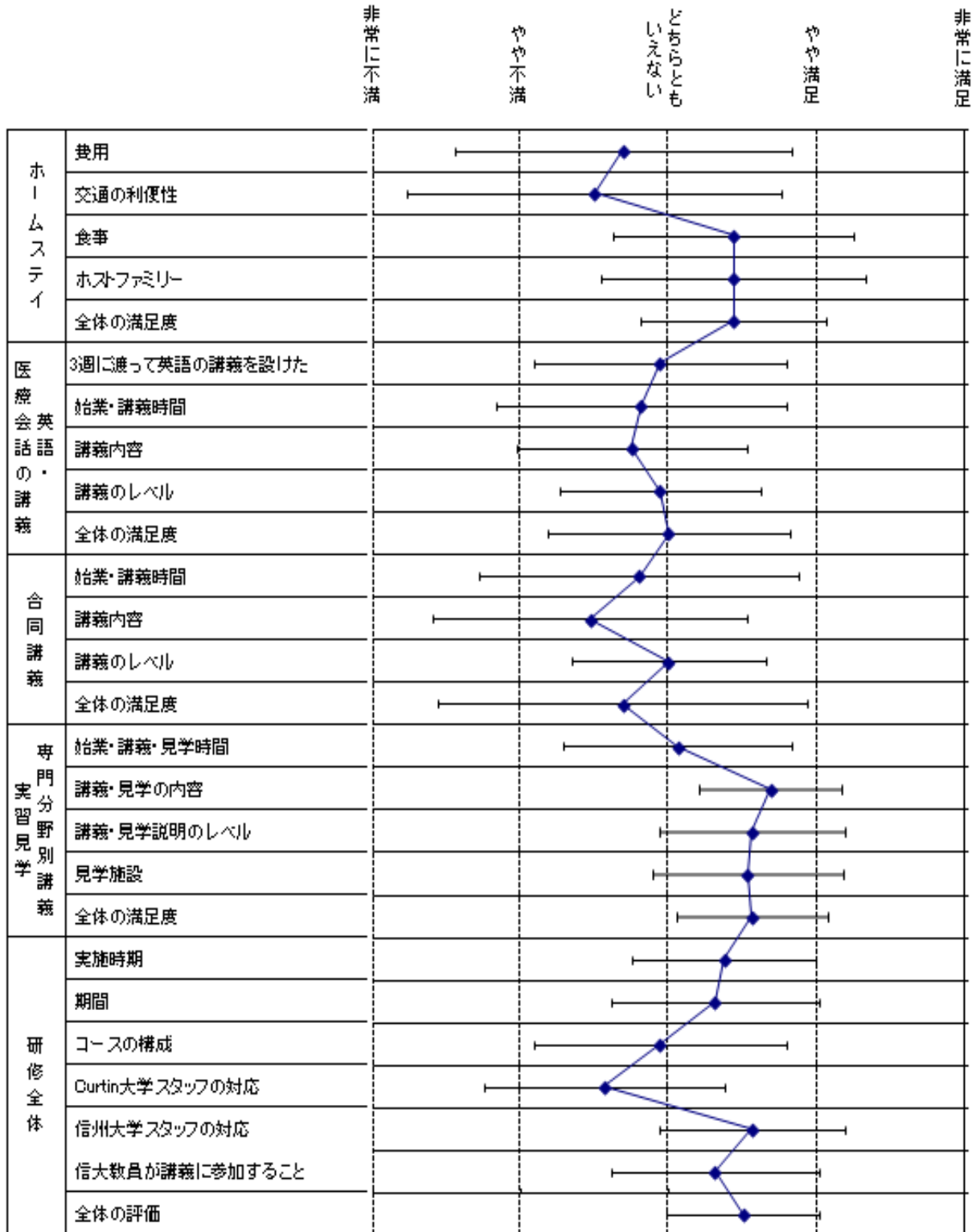
(下図. カーティンマップ  上から順)

- Physiotherapy (408)
- Nursing and Midwifery (405)
- Occupational Therapy (401)
- Biomedical Sciences (308)
- Student Central (101)
- Roobertson Library (105)
- CELC and Media Studies(208)



カーティン大学ベントレーキャンパス

D 研修に対する満足度



(Mean ± SME)

- ・コースの内容的なことに関しては、費用や交通の利便性などで比較的点数が低くなっている。
- ・英語の講義以外で、合同授業の点数の低さは、授業内容が概論的なこと、各専攻専門授業に比べて英単語に親しみが少ないため、内用が理解しにくかった面があるためと思われる。
- ・専門分野別授業については、おおよそ良好な評価であったが、今年度は例年に比べプログラム開始直前まで詳細が決まらない授業が多かったため、評価が下がっている項目があった。これは、カーティン大学スタッフの対応への満足度の低さと関連しており、次年度プログラでは改善に努める必要が有る。

12. 学生レポート

1) Curtin 大学夏プログラム学習成果レポート

看護学専攻 3年 長倉 瑞恵

私は入学当初から留学に興味があった。お金を貯めてかなった念願の参加だからこそ、このプログラムに対する私の思いは強かった。私は多くのことを経験し、そこからたくさんのことを学んだ。私にとって、人間的にも大きく成長できたと感じられる充実した3週間だった。

私にとって、最も印象深かったのは女性病院と助産院の訪問である。オーストラリアは「メディケア」という医療制度を取っている。Public hospitalである今回の見学病院では、ほとんどの医療が無料または少ない自己負担で受けられるため、年6000人、1日に換算すると、20人のお産が行われている。オーストラリア全体ではほとんどの出産が病院で行われていることは日本とほぼ変わらないが、24%が帝王切開によるもので日本より多い。しかし、入院日数は通常分娩で当日または2日以内、帝王切開でも4日以内で、日本より短い。そのような背景には、助産師が出産後の家庭に入り、その時にその場で母子とその家族に対してケア、サポートを行うことにある。産後の悩みや不安などは在宅で起こることが多いため、このような仕組みは日本も見習うべきところだと思った。また、オーストラリアでは、プライマリナースという資格を持った看護師は日本では認められていない縫合や抜糸を行うことができる。今回、カーティン大学の学生と一緒に抜糸や無菌操作を演習する機会があった。日本では行うことのできない手技を体験し、貴重な経験ができたと思っている。

今回の留学を通して、見える世界も広がった。カーティン大学には実に多国籍の学生が集まってそれぞれ専門分野を勉強しており、見学先の病院でもあらゆる人種の人々が看護師や助産師として働いていた。確かに文化や看護のやり方、看護師に求められている役割に多少違いがあり、戸惑うことも多いそうだが、それぞれの良いところを持ち寄って看護に反映させることで、より質の高い看護が提供できるのではないかと、思った。外国の医療に触れることで自国の医療を見直すきっかけにもなり、良い点、改善が必要な点が明確になる。日本の医療にこだわるのではなく、他国からより良い医療を取り入れることで日本の医療の向上につながると思った。

意外と多忙であった短期留学の間での観光も忘れられない思い出である。フェリーで行ったロットネス島では、そこにしか生息しないと言われているクウォッカとい

う野生の動物を見ることができた。心配した天気にも恵まれ、サイクリングをしながらきれいな海、風車を見ながら一日堪能した。また、今回 City to Surf(パースマラソン)に参加したのは私だけであった。申込みはしたものの登録証と交換できず、当日はナンバーカードなしで走るようになったが、沿道の多くの声援に後押しされた。鳴り止まない応援に勇気づけられ、最後まで諦めることなく、1時間29分35秒でゴールすることができた。この記録は大会の公式記録としては残らない。しかし、様々なハプニングを乗り越えて出たこの記録は、私の心の中には一生、生き続けるだろう。

生の英語に触れながら生活する留学は、英語を習得する最も近道だと私は考えている。英語圏の人々が話している言葉を日常的に聴くことで耳から入ってくる。自分が伝えるために、考えて話す。日々繰り返し使っていることでその表現が自分ものになる。また、その文化の中で暮らすことも英語習得には役立つと思う。あらゆる感覚を使うことはただ、机に向かって勉強する時とは違い、自然と身に着くことも多い気がした。自分では気づいていなくても、ホストマザーから留学後、"Your English has improved over the three weeks that you were in Australia."というメールが送られてきて、改めて英語が上達したという自信を持つことができ、嬉しさを感じた。この3週間で、私の英語に対する考え方は劇的に変化した。英語は難しく、一生私が習得することなどありえないだろうと思っていた。しかし、今では英語が身近なものに感じるようになった。英語を話す環境が少なかつただけで、恥ずかしがらず、自分から話をしてみるのが英語上達には欠かせないということを実感した。留学が終了しても、英語の勉強は独自で続けたい。

留学中、私は国を超えて多くの人々に支えられて生きていることを再認識した。英語がなかなか通じず心が折れそうになった時、支えてくれたのは日本から送られてきた部活の先輩や友達のメールだった。特に"Speaking in English is not so easy. However, it is not the point. The enthusiasm that you want to tell something and try to do so is the best way to communicate."という文章がとても印象的である。英語が話せないならば、非言語コミュニケーションなどあらゆる手段を活用しながら、何とかして相手に自分が思っていることを伝えよう、と思えるようになった。外国人に話しかけてみようという勇気を持つことができた。また、外国人もとても優しい人たちばかりだった。私が英語で

伝えようとする、彼らも、私の言いたいことを理解しようとしてくれた。分かりやすい英語に置き換えたり、ゆっくりと話してくれたり、中には紙に書いて伝えてくれた人もいた。特にホストマザーである Ms. Chris には感謝しても感謝しきれない。彼女はとても親切な方だった。困った時はあなたが思っていることを話してちょうだい、と優しく語りかけ、駄目なことはダメ、とはっきり言ってくれる。学校から帰ると毎回のよう宿題はないのと尋ねてきたり、私の知らない間にランチボックスにチョコを入れて驚かせるなど、温かみのある面白さも兼ね備えたマザーだった。本当のお母さんのような存在だった。昼食はサンドウィッチがほとんどであったが、毎回中身を変えるなど、ちょっとした配慮も忘れない。ディナーはすべて手作りしてくれた。実にバリエーション多彩で、この3週間で、同じ味が出てくることはなかった。ステーキにしても、ポークやビーフはもちろん、ターキー、ラム肉、カンガルーなど日本では珍しいお肉を食べさせてくれた。同じカレーでも、インド風とトマトカレーのように種類を変えてくれた。ある日、マザーに質問をするという英語の宿題が出され、ホームステイホストになった理由を尋ねた時、異文化に興味があり、ふれあうのが好きと答えてくれた。私がたまに作った日本食もおいしいと言って食べ、また、水不足で節水を怠らないオーストラリアでは、湯船につかる習慣だけでなく、毎日シャワーを浴びる習慣さえないにもかかわらず、私が毎日シャワーを浴びること、パースマラソンの前日は湯船につかることも許してくれた。家の中も土足でそのまま生活する、果物はもちろん、肉や魚、野菜などもフルーツナイフで切る、18時頃には帰らないと心配する、個人宅の庭とつながっている芝生の上を歩道として歩くなど、日本では考えられないようなことも多かったが、私はもちろん、マザーも異文化を受け入れようとしてくれていた。私の3週間が思い出として残っているのも、このようなホームステイ生活を送ることができたからだと思っている。

このプログラムで私は、本当に様々な人に出会い、助けられていることを実感しながら生活することで、看護師を目指すことになった原点を思い出した。2度の入院経験で私に接してくれた看護師さんに憧れをもち、人の役に立ちたいと思ったことがきっかけであった。今回、私が目指す女性はまた1人増え、看護職に対する思いは一層強くなった。たとえ日本ではオーストラリアのように産後、助産師が家庭訪問に行くことがなくても、私は出産を介した母子や患者さんとその家族に寄り添ったケアができる看護師または助産師になりたい。これ

からの学生生活、そして看護職として働いてからも、日々よりよい看護職を目指して精進していきたいと思った。

最後に、このプログラムを計画、調整・付添を通して、私たちの留学、健康や安全を見守ってくださった信州とカーティン双方の大学の先生方、本当にありがとうございました。



(看護・助産学科校舎の玄関)

2) Curtin 大学プログラム学習成果レポート

検査技術科学専攻 3年 池田 み奈美

私は Curtin 大学短期留学プログラムにおいて非常に充実した3週間で過ごすことができた。もともと英語が好きでもっと英語に触れたいと思っていたので、このプログラムがあると知った1年生の時から、参加しようと決めていた。また日本と外国の医療の違いにも興味があったので、それを知るには絶好のチャンスだと思ったことも本プログラムに参加する動機となった。非常に楽しみにしていたプログラムであったが、不安もあった。プログラム直前は学校が忙しく、英語の勉強ができない日々が続いた。また私たちが今まで勉強してきた英語は reading ばかりだったので、うまく向こうの方々とのコミュニケーションがとれるのか、授業を受けても理解できるのかなど非常に不安に感じていた。また私がお世話になる方は一人暮らしの70代の女性だったので、話が続きなかつたらどうしよう、食事はちゃんと用意してもらえるのだろうか、部屋にこもりつきりにならないだろうかなどの心配もあった。しかし、実際は違った。ホストマザーの方は非常におおらかで優しい方で、ホストマザーの経験も豊富な方だったので私は本当に何一つ不自由せず恵まれた生活を送ることができた。心配していた英語も辞書を片手に私が必死で話そうとすると、ホストマザーが私の言おうとしていることをくみ取ってくれいな

おしてくれたりした。それを聞き「ああ、こう言えばいいんだ。」などと考えながら、次にその言葉を使う時があったら積極的にホストマザーの教えてくれた英語を使うようにしていくと、自然に英語が身についていっているように感じた。また、時々ホストマザーのお孫さんも来て一緒に遊んだが、それもまたよい機会となった。私が英語を理解できなかった時には違う言い回しでしゃべってくれたり、絵や身振り手振りを交えて話してくれたりした。大人だと身構えてしまう私も、小さい子と遊ぶ時には自由に気兼ねなく楽しみながら英語をたくさんしゃべることができた。このように恵まれた環境の中生活できたので、英語を話すことへの抵抗感も徐々になくなりホストマザーと様々な話ができるようになった。お孫さんのこと、移住したこと、日本のことなどたくさんのことについてお話した。今思えばはじめは不安だらけだった私が、よくこんなにも色々な話ができるものだなあと感じる。それほど英語に接する時間、機会が多いということは大切なのだと感じた。またある時、学校内で一人昼食を食べている時に1人の学生からアンケートに答えてほしいと頼まれた。しかしそのいくつかの質問が理解できず、謝ると「全然気にしなくていい。私もスウェーデンから来て最初はとても苦労したけど、何年かここに住んで今はこうやって話せるようになった。だから頑張っただけ。」と言われた。これを聞いて「こんなにきれいな英語を話す人でもはじめは苦労するんだ。怖がらずにもっと英語を話してみよう。」という気持ちになれた。このように様々な人との出会いが私の英語への抵抗感をぬぐい去ってくれ、代わりに英語を話しコミュニケーションをとることの喜び・楽しさを与えてくれた。そしてもっと英語を学んで、聞きたくても聞けなかったことなどもっとたくさん話ができるようになりたい。このプログラムは私の英語の勉強へのモチベーションを上げてくれたとてもよい機会となった。また Curtin 大学には多くの留学生も在籍しており、これから社会にでていくに当たって、もっと広い世界に目を向けていくにはやはり英語は必要不可欠であるとも感じた。

とても充実したプログラムだったのですが残念だったのが、期間が短いということだ。私たちの専攻では、留学をバックアップするような環境が十分に整っていないように感じる。また残念だと感じるのが、本学での英語授業の少なさだ。確かに、基礎知識が十分でないままに留学をしてもその価値が半減してしまうかもしれない。しかし、ゆくゆくは英語を必要とする人が少なくはない分野であると思う。そのため早い学年から医療英語に

慣れ親しんでいく授業が必要なのではないかと感じる。具体的に言ってしまうと、1, 2年次の英語授業です。私だけでなくその他の学生からも聞かれる。信州大学の英語の入試レベルは他大学に比べ難易度が高いと言われている。しかし、入学してからの授業は非常に易しい内容となっており、そのために英語へのモチベーションが下がってしまった。そのためより質の高い、もっと学生が必死に勉強できモチベーションを高められる授業が必要なのだと思う。

英語の勉強も充実していた3週間だったが、その他の面でも素晴らしい日々が送れた。ホストマザーの作ってくれる料理はおいしいものばかりだった。私はもともと食べるのが好きなので、好きな料理などについて話す夕食にその料理を作ってくれた。また食後も毎日ケーキとアイスクリームを出してくれ、それを食べながら1日の出来事について話したり、テレビを一緒に見たりするのがとても楽しかった。中でもフィッシュ&チップスは美味しく私がもう一度食べたいとお願いすると、作ってくれた。昼食も毎日サンドイッチとフルーツ、ジュース、ケーキを持たせてくれた。ある時私が自分で買った好物のパイナップルジュースを飲んでいて、パイナップルジュースが好きなのかと聞いてきた。そのため好きだと答えると、次の日からお昼のジュースがパイナップルジュースになっていた。わざわざ買ってきてくれお弁当に入れてくれた。他にも疲れていたならシャワーにゆっくり入るように、色々なところへでかけてパースをもっと楽しむように話をしてくれた。またお孫さんたちと遊ぶことが私の楽しみでもあった。私の化粧品に興味を示し、私にお化粧してくれたりもした。他にも電子辞書、電動シェーバーを気にいってその説明をしたりして遊んでいた。帰国間近になると毎日遊びに来てくれて、私のノートに絵を描いてくれたり、ダンスや歌を披露してくれたり、学校の話をしてくれたりした。その時間は私にとって忘れられない大切な時間だ。

オーストラリアの医療システムに関して私が感じたことは、西オーストラリアの地域特性が医療システムに大きく影響を与えているということだ。西オーストラリアが非常に大きな州であるために、公立病院までの距離が遠くドクタープレーンを使用せざるを得ない状況は厳しいものがあると感じた。また、診療所といっても看護師の方が常駐しているのみで、医師や検査技師がいない診療所は少なくないということに驚いた。日本ではやはり病院間の設備や提供できるサービスに差はあるものの、それでもやはりある程度の医療が提供されている。しか

しオーストラリアでは格差がありすぎて、その格差にただただ驚くばかりだった。臨床検査技師の職場環境、感染症対策等々の前に、オーストラリア医療の均等化をいかにして進めるか、またその難しさがどれほどのものか様々な問題があることを知った。ほかにも感じたことは、看護師の負担が大きいということと、高度な能力を必要とするということだ。診療所に検査技師、医師、PT、OT がいない分看護師はできる最大限の仕事をこなさなければならないというのは厳しいものがあると感じた。診療所に移る場合も家族で引っ越さなければならない場合、その家族の人間関係や生活環境をガラリと変えなくてはならないので容易なことではないとも言っていた。日本という小さな国で生きている私には信じられない話ばかりだった。

臨床検査に関する見学では赤十字の血液センター、パソロジーラボに見学に行った。私は血液センターに行ったことがなかったので、授業で習った機器や分析方法を実際に見られてとてもよい機会となった。日本ではもう使用していない方法も使用されていたりして、興味深いものばかりだった。同時に日本の血液センターについてももっと知りたいと思った。オーストラリアのシステムについて聞いていても、では日本のシステムはどうかと聞かれると知らないことも多かったので、わからなかったことについては調べて日本の医療システムに関しても知識を深めていきたいと思った。今回のプログラムはオーストラリアの医療に関して勉強できただけでなく、日本の医療について考える機会を与えてくれるよいものとなった。



カーティン大学日本語会話クラブの学生達と

3) Curtin 大学プログラム学習成果レポート

理学療法士学専攻 2年 松島 祥帆

今回、私がこのプログラムに参加しようとした目的は2

つある。1つは英語力を身につけるため。もう1つは、開業権をもつなど日本の制度とは大きく異なるオーストラリアの理学療法を学ぶためである。目的を完璧に達成することができたとは思えないが、今までとは違う、新しい目線で世の中を見つめられるようになったとても充実した日々であった。

1週目は英語の授業もあったが、それよりホストファミリーと会話をすることが私の英語の勉強であった。私の話す英語は文章になっておらず、発音はめっちゃくちゃで、ホストファミリーは私の言いたいことを理解するのに相当苦労したと思われる。ホストファミリーの話す英語の特別な言い回しはほとんどわからなく、いちいち易しい文に言いかえてもらい、2度3度同じことを繰り返してもらうことも度々であった。どの様に英語で表現すればいいかわからないことがほとんどで、電子辞書は手放せなかった。それでも、言いたいことを理解してもらえた時の嬉しさはこの上ないものであった。この3週間で私の英語力が飛躍的に進歩することはなかったが、毎日英語を聞いていると、1週間目より2週間目、2週間目より3週間目の方が、単語の意味がわからずとも1つ1つの単語の句切れがわかるようになっていった。まだまだ自分の英語力のないことを実感し、少々悔しくもあったが、日本に帰ってから英語の勉強をし、もっと英語力をあげたいという意欲が高まった。

オーストラリアの理学療法は、開業ができるほど地位の高い職種であることは事前に調べていたが、果たしてどんな利益があるのか、どういった問題が生じるのかということは疑問であった。実際、オーストラリアの理学療法士養成校は、国全体で10校ほどしかなく、専門学校も多い日本のように、能力の有無に関係なく、誰でも簡単になれるわけではなかった。しっかり勉強して、医学科と同じくらいの偏差値がないと大学に入れないことが、オーストラリアの理学療法士の地位が高い理由の1つとして挙げられるという。そして、開業できるということは自ら診察するため、ありとあらゆる病気・症状を知っている医師並みの豊富な知識が必要だということである。日本では大学1年生の時、一般教養を学ぶが、オーストラリアでは1年生から専門科目のみを学ぶそうで、それだけ専門的学習量が多い。実際に、カーティン大学で理学療法学を専攻している学生とともに授業に参加させていただいたが、誰しもが高い意欲をもって授業に取り組んでいる様子が印象的であった。日本で授業中に質問・発言することは、あまりいいことだとは思われていない。しかし、現地の生徒たちはわからないこと

があれば、すぐさま質問し、生徒一人一人が自分の意思を強く持って発言していた。先生も質問されたことを丁寧に説明し、話の節目で「質問はあるか」とよく聞いていた。私はよく授業中にわからないことがあっても、後で聞こうと思い、後々質問したいことを忘れていたり、ある部分がわからないとその続きの話があまり理解できなかったりということがあるので、この授業形態はいいなと思った。これは文化の違いではあるが、いいところはやはりまねしたいものである。

私は今回多くの貴重な体験をさせていただいたが、特に私にとって最も貴重だったのが、日本で理学療法士のライセンスをとって働いたのち、現在カーティン大学で改めてライセンスをとるために勉強している2人の日本人に直接会ってお話をさせていただけたことである。お二人はオーストラリアに来て、大学で英語を必死に勉強し、英語のテストを合格して理学療法学専攻に編入し、現在通っているわけだが、英語の勉強はとても大変だったそうである。それでも、今オーストラリアでライセンスをとって、そこで働くという目標を達成するために努力しているお二人はとても熱く、私にはまぶしかった。お二人は、日本の理学療法とオーストラリアの理学療法の違いや、オーストラリアの理学療法の良いところ、さまざまなことを話してくれた。私の能力でそれをうまくまとめてお話しすることは極めて難しいが、お二人のお話が自分の中にある何かを動かしてくれたということは間違いない。英語もできないし、勉強も大変そうだし、海外で働くなんて無理でしょ。これが私の以前の考えであった。でもこれは単なる私の逃げでしかなかった。お二人は現にそれが無理でないことを証明している。私はまだ日本の理学療法士にもなれておらず、実際の日本の理学療法士の良さも悪さもほとんど知らない。ましてや、オーストラリアの理学療法士についてもお話を聞くだけで、実際は知らない。どっちがいいかなど到底わからない。どっちが正しいかなんてわからない。でも、不可能でないことははっきりとわかった。ただ自分がやるか、やらないかでこんなにも世界が違うということを思い知らされた。お二人とお話しできて、勉強をもっと頑張ろうと思う気持ちが強くなった。確かに勉強は大変である。自分との闘いである。でも、負けたくないと思った。絶対理学療法士になりたいと強く思えるようになった。

日本とオーストラリアの文化の違いで私がいいと感じたことがある。それは人種に関係なくそれぞれお互いを尊重しあっているところである。日本人は日本で外国の方を見ると、少し意識してしまう気がする。肌の色も違う、

髪の色も違う、宗教も違う、生まれも違う、でもそんな人それぞれいいじゃない。そんな感じが私は好きであった。日本の学校は髪を染めるのを禁止したりして、学校で座って授業を受けている人はみんな黒髪のほぼ肌の色も同じの人。それもある意味怖いかもかもしれないと思った。みんな違ってみんないい。まさにこの言葉が当てはまる。

また、授業後や休日にはいろいろなところへ遊びに行き、広大な自然に触れることができた。空には様々な種類の雲が浮き、永遠と広がり渡っている青さがとてもきれいであった。夜は星がきれいで、月がどこからか近づきげられているようなくらい低いところにあった。ロットネス島でサイクリングをしたり、動物園でカンガルーに餌をあげたり、チョコレート工場・ワイナリー・水族館…いろいろな所に行ったが、どこもとても楽しかった。

私は今回このプログラムに参加することができ、本当に良かったと思っている。日本と異なる文化に触れることで、いままで考えたこともなかった面から日本のことを考えもしたし、新しい考えも得た。いかに自分の考えが甘く、狭いものであるかがわかった。多くの人に出会い、多くのことを自分の体で感じ、学ぶことのできる最高の経験となった。この経験を無駄にしないよう、決して忘れることなく、これからの生活に役立てていきたい。そして、今回私がこのように素晴らしい経験をすることができたのも、信州大学の先生をはじめとする多くの方の協力があったからこそだと、心から感謝している。ありがとうございました。



カーティン大学研究施設;3次元動作解析棟

4) Curtin 大学プログラム学習成果レポート

作業療法学専攻 2年 佐藤 正彬

私は高校3年生の時、信州大学医学部保健学科のオープンキャンパスに参加した。その時に、この Curtin

大学短期留学プログラムの存在を知り、ずっと興味を抱いていた。受験勉強の末、晴れて信州大学医学部保健学科に入学することができ、家族をはじめ多くの人達の協力のおかげで、今年、憧れだったこのプログラムに参加することができた。

プログラム参加を決意した頃は、出発までかなり英語を勉強してオーストラリアで日常会話に困らないようにしようと意気込んでいたが、結局、ほとんど英語の勉強をすることなく、出発前日を迎えた。松本を出発してPerthに到着するまでの間に、慌てて基本的日常会話表現だけでも覚えようと試みたが、ほとんど頭に入っていないまま、現地に到着した。Curtin 大学に到着し、各ホストファミリーが私達を迎えに来てくれた。その時、はじめてホストファミリーと対面した。大学から家までの車の中で、ホストマザーやホストファザーが英語で積極的に話しかけてくれたり、いろんなことを質問してくれたが、私はほとんどまともに受け答えをすることができずに、非常に自分の不甲斐なさを感じたことを覚えている。初日は、ホストファミリーと英語でうまくコミュニケーションを取ることができず、本当に3週間生活できるのか不安だった。しかし、私が英語をうまく話せないことを言うと、ホストマザーは「この3週間で少しでも多く英語を喋れるようになるために私達も協力するから、その代わりに、私達に箸の使い方を教えてちょうだい」といった優しい言葉で、私を励ましてくれた。それからは、間違ってもいいから積極的に話しかけたり、質問したりするようになり、自分自身を現地での生活に適応させていくことができた。また、Curtin 大学での講義やホストファミリーとの会話の中で意味がわからなかった単語をノートにまとめたり、時間に余裕がある日は英語で日記を書いたりしたことで、3週間目には教授や実習先のスタッフとお話することができるレベルまで達することができた。英語で会話することの大変さをこの3週間で身をもって体験した。しかし、この3週間で英語を喋れるようになるために自分自身が行った努力は、きっとこの先様々な場面で役に立つだろうと思う。

Curtin 大学では、英語の講義、オーストラリアの医療に関する講義、各専攻別の講義、施設見学といった内容の充実したプログラムを体験することができた。特に、今年度は私の専攻するOTのプログラムが開講されたので、講義や見学実習から様々なことを学ぶことができた。英語の講義では、オーストラリアに関連することや、基本的日常会話表現、医療用語などを学ぶことができた。また、英語の講義の一環で、オーストラリアの先住

民族であるアボリジニの講師の方から、アボリジニの文化について教えて頂くことができた。アボリジニの人々の生活様式や慣習は現在の私達の暮らしとはかけ離れていることが多く、非常に興味深い内容だった。オーストラリアの医療に関する講義では、メディケアという医療制度や先住民族アボリジニの人々の健康問題について学ぶことができた。講義を聞いた中で、オーストラリアは国土の広大さゆえに、おそらく日本以上に、都市部と地方の医療格差が激しいという印象を受けた。さらに近年では、先住民族アボリジニの中から医師や看護師といった医療職の資格を持つ人が増えてきていることを知り、言語や文化の壁を乗り越え、人々の健康のために医療職を目指すアボリジニの人々の志の高さに感銘を受けた。専攻別の講義では、大講義室での講義や少人数でのグループワーク形式の講義などに参加した。もちろん講義自体は英語なので、半分くらいの内容しか理解することができなかったが、1つ1つの講義が私にとってはとても刺激的だった。特に刺激を受けたのは、どの講義においても、多くの学生が積極的に発言や質問をしていたことだ。こうした学生参加型の講義や教員と学生の親密さは日本ではあまり見ることがないのであり、とても魅力を感じた。施設見学では、病院と発達障害児の支援施設を見学した。病院では、リハビリテーション部門の病棟やリハ室を見学した。建物自体はそれほど新しくなかったが、リハ部門だけで広いスペースを有しており、設備も充実しているといった印象を受けた。発達障害児の支援施設では、施設で働く作業療法士の方に付き添って実際に対象者のリハの場面を見学させて頂くことができた。私はまだ病院実習に行っていないので、この先実習に行く上で大切な知識、技術、態度を学ぶ貴重な体験をすることができた。見学してみて、対象者やその家族に対する接し方や基本的なアプローチで大切な事は日本と共通していると思った。しかし、現地で行っていた発達障害児に対する集団の作業療法は、日本ではあまり目にしたことがなく、とても珍しいものであった。また、Curtin 大学のキャンパスは日本の通常の大学と比べると非常に広大で、私はその広さに驚いた。ヘルスサイエンス学部は看護、検査、PT、OTとそれぞれ校舎が分かれていて、それぞれの建物が広く、大きかった。中でも、私の専攻するOTの校舎は改装されたばかりで新しく、設備も非常に充実していて、日本の学校との差に衝撃を受けた。1日1日のプログラムが非常に新鮮で、私にとって、とてもいい刺激になった。

3週間という期間の間に、授業の空き時間や休日を使って、Perth 市内、及び Perth 市近郊のいくつかの観光地へ行くことができた。キングスパークは2回ほど訪れた。昼と夜で公園から一望できる景色が全く違っていた。どちらも非常に美しい景色だったが、ビルに明かりが灯った頃の夜景は格別に美しかった。ロットネスト島は私が訪れたいいくつかの観光地の中でも、一番楽しかった。島の広大な敷地を仲間と自転車で行き回った。天気もよく、行く先々でいろんな素晴らしい景色を見ることができた。

中でも、灯台のある高台に登り、島全体を一望した時のあの光景とあの感動は忘れられない。他にも、動物園に行ってコアラやカンガルー達と触れあったり、ロンドンコートやフリーマントルに行ってヨーロッパ風の街並みを見ながら買い物を楽しんだり学校がない時間も非常に有意義な時間を過ごすことができた。

3週間オーストラリアに生活して、いくつか気付いたことがあった。一つ目は、非常に多種多様な人達が共存していることである。大学内や町中でも、アジア系の人、ヨーロッパ系の人、アフリカ系の人、中東系の人というように必ず複数の人種の人を目にした。実際に、私を受け入れてくれたホストファミリーもアフリカ出身の人であった。ホストマザーがよく私に、例えどの人種であろうと、どの職業についていようと、彼らはお互いを尊重し合って生活していると話していた。こうした人それぞれのアイデンティティを重んじる現地の慣習はとても素晴らしいものだと思っただ。二つ目は、公共交通機関のバリアフリー化が非常に進んでいることである。ほとんどのバスがノンステップバスであり、車椅子の乗客が乗り降りしやすいように車体が斜めに傾くようになっていた。さらに、日本よりもバリアフリー化が進んでいると感じられたのは鉄道である。ホームと電車の高さが必ずフラットになっており、どの車両にも車椅子専用スペースが設けられていた。また、どの駅にも車椅子用のスロープかエレベーター、エスカレーターが設置されていた。障害者への配慮がいろんなところへ行き届いていた。このように、オーストラリアのいい所もたくさん見つけることができたが、同時に、日本のいい所や日本も負けていないところもたくさん発見することができた。

今回、この短期留学プログラムに参加し、外国の教育や文化に親しむことで、自分自身の物事に対する視野を大いに広げることができた。3週間で得た一つ一つの体験が、私にとって良い刺激となり、自分の将来に対するモチベーションを高めることができた。このプログラ

ムに参加したことに満足するのではなく、この3週間から学んだ様々な経験と知識を今後の学習に大いに活かしていきたいと思う。今後は、英語と自分の専門分野のことについてさらに勉強し、将来、他の国の専門教育や文化についても学んでいきたいと思う。

最後に、Curtin 大学短期留学プログラム2011の運営にご尽力くださった先生方、スタッフの方々、そして家族へ心より感謝申し上げたい。



State Child Development Centre にて



ウォンバットと一緒に(カバシャムパーク)



共通授業の一コマ



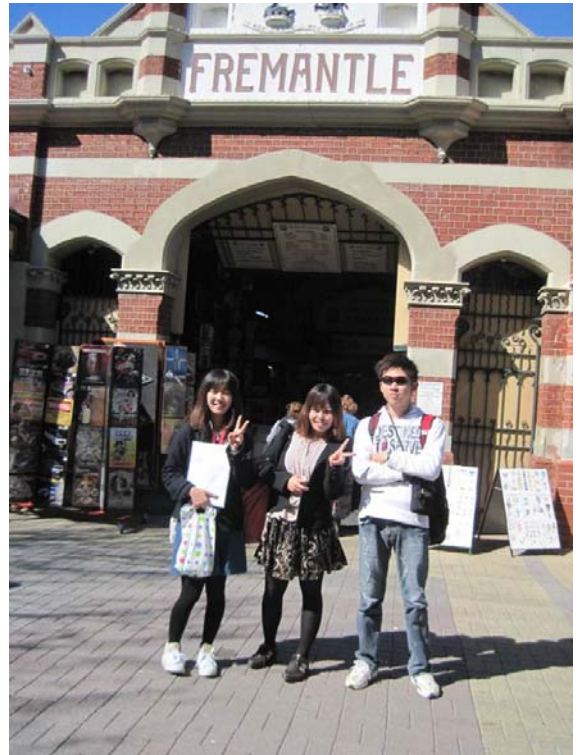
ロットネスト島のウィークエンド



カーティン大学校章



パース夜景



フリーマントルにて



Curtin の学生たちと(カーティン日本語会話クラブ)



カーティン大学バスポート

【編集後記】

10回目を迎えたこのプログラムでは、医療英会話、合同あるいは専攻別授業に加え、参加学生が現地学生の授業を聴講し、演習に参加する機会が増えてきた感じです。医療現場の見学においては、現地スタッフと交流を図り、医療のみならず、社会福祉制度、疾患や障害を抱える人の生活などを、日本と比較しながら学んでいるように思います。また、授業、臨床見学以外でも、カーティン日本語クラブ学生との交流、ホストファミリーとの生活やパース市民との異文化交流、カバシャムパークを訪れてコアラやウォンバットと写真撮影、ロットネスと島などの名所観光など、多くの貴重な体験ができたのではないのでしょうか。同時に、松本キャンパスでは機会の少ない他専攻友人との交流により相互理解を深める機会にもなったようです。同行した教員も、17名の学生さんと3週間、松本とは異なるカーティン大学のキャンパスライフとパースの日常を共有し、普段は機会が限られている他専攻の学生さんとも意見を交わすことができました。オーストラリアの大学教育を垣間見、国による学生さんの違いや参加学生さんの新たな側面を見つけられたことは、とても貴重な体験となりました。

日本とは言葉や習慣が異なるオーストラリアで、最初は異国で生活する不安感と異文化、未知の世界を知りたい好奇心が折り重なる中、やや消極的だったのではないのでしょうか。しかし、後から訪れた私がみた参加者の学生さんは、得手、不得手にかかわらず、周りとのコミュニケーションを心がけ、ホストファミリーや現地の方々に聞きながら試行錯誤し、目の前の問題を一つずつ解決できていたように感じました。研修半ば以降は、ショッピングにも慣れ、帰国直前には一人ずつ英語でスピーチを行うなど、異国生活をおくるなかで、自信ややる気につながる経験と学習ができたことと思います。

松本ではできない貴重な経験を提供するこのプログラムは、藤原孝之先生、成沢和子先生はじめ、現在在職されない先生方、Goh Ah Chen 先生を中心としたカーティンプログラム担当の方々の尽力、資金面を含めた信州大学と保健学科同窓会の支援、そして医学部長、保健学科長と保健学科教職員の皆様のご助力などに支えられ、第10回プログラムまで継続することができました。ここに、あらためて心より感謝申し上げます。

(文責、大平)

.....
「信州大学-Curtin University 大学間学術交流協定に
基づく平成 23 年度夏期海外単位認定プログラム 実施報告書」

2012 年 3 月 1 日

発行責任者:寺田 克

編集 :平成 23 年度夏期留学・単位認定プログラム担当チーム

発行 :信州大学医学部保健学科

.....